横浜医学，61，25-29（2010）

原　著

横浜市立大学附属市民総合医療センターにおける医療用麻薬初回処方の現状調査

川崎彩子[1)2)]，斎藤真理[1)2)]，縄田修一[1)3)]，
岩崎有紀[1)4)]，大柄根いづみ[1)3)]

横浜市立大学附属市民総合医療センター
[1)] 緩和ケアチーム，[2)] 総合診療科，[3)] 薬剤部，[4)] 看護部

要　旨：外来通院がん患者における麻薬開始時の問題点を明らかにすることを目的として，麻薬初回処方の現状調査を行った．2007年1月から12月までに横浜市立大学附属市民総合医療センターで医療用麻薬を開始されたがん患者299名を対象とした．先行研究では麻薬は外来で開始されることが多いという報告がみられたが，今回の調査では初回処方は入院患者195名に対し外来患者104名という結果で入院中に開始される患者のほうが多かった．外来患者の初回麻薬処方時の併用薬は緩下剤が50.0%，制吐剤が41.3%，NSAIDs が51.9%で処方されていた．外来麻薬開始後に2割の患者が痛みを理由に予約外受診し，その半数でレスキュー処方が出されていなかった．副作用や疼痛評価についての診療録記載も半数に満たなかった．外来での麻薬処方開始時の問題点として不十分な副作用対策と疼痛アセスメントが挙げられた．

Key words:　麻薬性鎮痛剤（Opioid analgesics），疼痛緩和（Pain relief），癌性疼痛（Cancer Pain）